

# 大学生の職業意識

## —特に、働く目的について—

和田 美知子

### I. 研究の目的

これまで数回にわたり、大学生の就職観（勤続期間、就職先の選択基準等）について、就職氷河期といわれた1998年（A群）と、リーマンショック直前の2008年（B群）の調査結果を報告した。内容は、① 定年まで働きたいのはA群よりB群の方が圧倒的に多いこと、② 就職先の選択基準は「企業力」、「生活条件〈ハズバークの衛生要因に相当する〉」、「キャリアアップ〈同じく動機づけ要因に相当する〉」、「職場環境」の4因子で説明されること、③ 特にB群では「企業の安定性」が企業力ではなく生活条件として認識されていること、等である。

また、リーマンショック後の2010年5月にも同様の調査を実施し、2008年5月との比較により、事務系・営業系職種において半数以上の「企業が採用時に重視する能力」16項目（厚生労働省が2006年1月に発表した『若年者の就職能力に関する実態調査』結果より抽出）について、次の結果を得た。① 現在の自分の修得レベルと卒業時までに修得できる（修得しよう）と思う目標のレベルの平均値には、両群とも有意な差がある。② 現在のレベルの平均値は、どの能力も2010年の方が過小評価しており、その内9項目には両群間の有意な差が認められた。③ 卒業時の目標レベルはほぼ同じであった。

ところで、アルバイト経験のある学生は多い（2011年の本調査では80%）が、その経験が職業意識を高めるのではなく、むしろフリーターでも何とかかなるという感覚に陥らせ、自分なりの職業観の形成を阻害しているのではないかと感じるが増えている。

また、現在の大学生は小中学校からの職業指導のカリキュラムを通して、働くことの意義を考え、職業観を形成してきているはずなのに、実際には就職活動から逃げ腰になっている学生が少なくない。エリクソンの言う「アイデンティティ拡散」、すなわち、社会のどこにも自分の居場所がないと感じ、自分の将来を見据えた行動を起こせない状態に陥っているとみてよいだろう。このような場合、人間関係を通して様々な役割を経験し、模索していくことが必要となる。

その一つの機会として、就職活動の一環としてのインターンシップがさまざまな形態で盛んに実施されるようになってきている。本学においても、開学以来30年近く、授業として1年次後期に5日間のインターンシップを実施してきた。1年次後期の定期試験後という日程の制約から、実

習後にはアンケートのみを実施しているが、その中に『働くということ』について、どのように考えていますか。また、実習の前と後では考え方に変化がありましたか。』という質問がある。最も多いのは「アルバイトと就職（正規雇用）の違いが分かった」という記述だが、「働くのはお金のためと思っていたが、他者〈社会〉のために役に立ちたい」とか、「働くことはお金をもらえる場という考えから、自分が成長できる場と変わった」という内容の記述もよく見られる。単位が絡んでいるので多少言葉を飾っているかもしれないが、たとえ僅かな期間でも、インターンシップには学生の職業意識を高める意味があると思いたい。

初めは生活のため、あるいは偶然に就いた職業であっても、仕事を続けていくことで人との信頼関係を築き、アイデンティティを確立し、自己実現を図ることができるようになれば、充実したワークライフを送っていけるはずである。

「何のために働くのか」を言い換えれば、働くという行動を起こす何らかの欲求あるいは動機と捉えられる。この動機づけに関する内容理論としては、マズローの欲求階層説（生理的欲求・安全の欲求・所属と愛情の欲求・自尊と承認の欲求・自己実現の欲求）やアルダーファの ERG 理論（生存欲求・関係欲求・成長欲求）等があるが、本論では、一般に言われている『職業の三要素』すなわち、「経済性」（職業によって生活の安定を求めようとする）、「個人性」（職業のなかで個性を発揮し生きがいを得ようとする）、「社会性」（職業を通じて社会に貢献しようとする）を基に、現在の大学生がこれをどのように捉えているのかを知ることにより、大学生の職業意識の一端を明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### (1) 調査対象者

東京都・埼玉県内の大学生 214 名（男子 61 名、女子 153 名）で、平均年齢は 19.5 歳、86.4% が 2 年生である。今回は、男女を一緒にして集計・分析を行った。

### (2) 調査材料

「働く目的」に関する考え方について 30 項目を示し、“非常にそう思う” から “全然そう思わない” までの 5 件法で回答を求めた。なお、質問項目は「職業の三要素」を想定して作成した。

### (3) 手続き

2011 年 6 月に各教室において教示を読み上げ、学生の同意を得て実施した。

## III. 結果

主因子法・バリマックス回転による因子分析の結果、ほぼ想定通り「職業の三要素」に相当す

る 3 因子を抽出した（表参照）。各因子のクロンバックの  $\alpha$  係数は 0.8 以上である。なお、固有値 1.0 以上では 7 因子が抽出されたが、1 因子はほぼ因子 III と一致し、4～7 番目の因子は細分化され合理的な解釈ができないものだったので破棄した。

それぞれの因子内の項目の平均（SD）を見ると、因子 I が 3.8（1.06）、因子 II が 3.0（1.13）、因子 III が 4.2（0.69）となった。

因子 I では「経験を積む」「自分の人生設計」に続き、「自分の能力を向上させる」とともに平均値の高いのが、「他者の役に立つ」である。また、「社会に認められたい」も因子 II の負荷量と

表 因子分析結果と各項目平均（SD）

項目	負荷量	共通性	平均	SD	1	2	3	4	5
<b>因子 I 「個人的向上」 (<math>\alpha = .897</math>)</b>									
8 さまざまな経験を積むためである	0.804	0.672	4.4	0.83					4.4
28 自分の能力を向上させるためである	0.796	0.672	4.0	0.96					4.0
19 自分のやりたいことを見つけるためである	0.774	0.630	3.8	1.12					3.8
24 自分の生き方を探すためである	0.763	0.616	3.9	1.03					3.9
23 技術を身につけるためである	0.678	0.527	3.7	1.09					3.7
17 生きている実感を味わうためである	0.602	0.464	3.7	1.14					3.7
29 他者の役に立つためである	0.584	0.473	4.0	0.91					4.0
3 人間関係を広げるためである	0.548	0.331	3.7	0.97					3.7
5 自分の人生設計のためである	0.544	0.325	4.1	0.95					4.1
18 社会に認められたいためである	0.499	0.489	3.5	1.13					3.5
4 社会のしくみを知るためである	0.485	0.300	3.9	1.02					3.9
2 自分に合った仕事を探すためである	0.467	0.281	3.5	1.06					3.5
21 取得した資格を生かすためである	0.433	0.372	3.3	1.16					3.3
<b>因子 II 「社会的立場」 (<math>\alpha = 0.805</math>)</b>									
20 国民としての義務を果たすためである	0.728	0.607	3.1	1.14					3.1
13 人間は皆働くためである	0.662	0.449	2.0	1.16					2.8
26 社会的な地位を高めるためである	0.643	0.506	3.2	1.08					3.2
9 国の産業経済に貢献するためである	0.611	0.452	3.0	1.08					3.0
14 時間を有効に使うためである	0.583	0.386	3.2	1.11					3.2
11 社会の一員になるためである	0.569	0.465	3.9	0.96					3.9
22 立身出世を望むためである	0.539	0.348	3.0	1.06					3.0
6 友人も働くためである	0.457	0.239	2.0	0.91					2.0
<b>因子 III 「経済的保障」 (<math>\alpha = .840</math>)</b>									
25 お金をためるためである	0.787	0.625	4.3	0.83					4.3
27 食べるためである	0.716	0.530	4.3	0.79					4.3
1 収入を得るためである	0.711	0.516	4.3	0.76					4.3
12 自分の生活を安定させるためである	0.710	0.586	4.4	0.75					4.4
7 人並みに生活するためである	0.627	0.447	4.0	0.94					4.0
10 お金を儲けるためである	0.625	0.399	3.9	0.92					3.9
30 生きていくためである	0.591	0.399	4.7	0.63					4.7
15 好きな物品を購入するためである	0.543	0.395	3.9	0.93					3.9
16 家族の生活を守るためである	0.512	0.440	4.3	0.90					4.3

(累積寄与率 46.47%)

僅差ながら因子Ⅰの中にある。これは、他者の役に立てることまたは社会に認めてもらえることが、自分自身の成長につながるとの考えであろう。

因子Ⅱは全項目が4.0未満であるが、その中では「社会の一員になる」が3.9で最も高い。全項目の中で2点台は「友人も働く」「人間は皆働く」のみであるが、周囲に追随して働く気持ちは低いといえる。

因子Ⅲは逆に全項目が3.9以上であるが、特に「生きていく」ためという項目は全項目中で最も高く、回答欄にも二重丸が散見された。また、お金を「貯める」と「儲ける」ことの捉え方の違いも興味を引くところである。

以上の結果を踏まえて、因子Ⅰは『個人的向上』、因子Ⅱは『社会的立場』、因子Ⅲは『経済的保障』を目的とする因子と、それぞれ解釈した。

#### Ⅳ. 考察

本研究の分析により、次の2点が明らかになった。

- (1) 大学生が考える働く目的も、「職業の三要素」に準じた3因子、すなわち『個人的向上』・『社会的立場』・『経済的保障』を目的とする因子で説明される。
- (2) 現段階（主に2年次）では『経済的保障』が第1であり、働くことと『社会的立場』とはまだ明確に結びついていない。

また、短大1年次のインターンシップでは、『経済的保障』に『個人的向上』という目的が付加されることが多いこともわかった。

大学生の半数が卒業後も定職に就けないか2年以内に退職してしまうという。職業指導の基本は自己理解、職業理解とそれらのマッチングであるが、「働く目的」についても、共通性がやや低い項目を見直したり、職業未決定尺度調査などと組み合わせたりして再調査し、職業指導に活かしていきたい。

#### 《参考文献》

- 和田美知子. (2010). 大学生の就職観に関する研究. 城西短期大学紀要第27巻第1号 (83-90).  
佐藤恵美. (2012). 1章1・2. 岡村一成 (監修), ゼロから学ぶ経営心理学 (6-7). 学文社.  
喜岡恵子. (2012). 2章1. 岡村一成 (監修), ゼロから学ぶ経営心理学 (20-22). 学文社.